第３部　教科研究・特別研究

Ⅰ.

doi: 10.18999/bulsea.67.105

くずし字による古典教育の試み（７）
―和本バンクを活用した出前授業―

加　藤　直　志
加　藤　弓　枝[*1]・三　宅　宏　幸[*2]

【抄録】　日本近世文学会の「出前授業」の一環として、同学会所属の研究者に講師をお願いし、和本（古典籍）を利用した特別授業を協同で実施した。同志社大学古典教材開発研究センターの和本バンクを活用し、本校の中学３年生に、実際に和本（古典籍）に触ってもらうという授業を行った。出前授業と和本バンクを組み合わせることで、古典への興味関心を高めてもらうことをねらった。

【キーワード】　くずし字　日本近世文学会　和本　和本リテラシー　和本バンク　オンライン授業

１．はじめに

名古屋大学教育学部附属中・高等学校（以下、「本校」とする）では、2015年以来、日本近世文学会による出前授業の一環として、くずし字による古典教育の試みを行ってきた。2021年度も、2022年３月16日（水）に、本校の中学３年生２クラスを対象として、出前授業を実施した。これまでは、くずし字を解読しながら、江戸時代の昔話や仮名草子、記録などを読むという内容だったが（注１）、今回は、くずし字を丁寧に解読するということよりも、和本に直接触れる経験を通して、古典への興味関心を深めてもらうことをねらいとした（ただし、これまでの出前授業との連続性を考慮し、本稿の題目は「くずし字による古典教育の試み（７）」とした）。

なお、堀川貴司氏が書誌学の対象としてあげる書物のうち、「江戸時代までに日本で作られた書物」、「それらの影響下で明治中期頃までに日本で作られた書物」（注２）を、本稿において「和本」（あるいは「古典籍」）と呼ぶこととする。和本には、くずし字で書かれているものも多いが、そうでないものもある。また、物語や和歌などの、いわゆる「古典文学」には限定されない、様々な分野の書物が含まれる。詳細は後述するが、様々な分野の和本を用意することで、教科書に載っている古典は、和本のなかでもごく一部に過ぎないということを生徒達に理解してもらいたいと考えた。

実際に利用した和本については、同志社大学古典教材開発研究センター（センター長：山田和人、本稿の執筆者３名もセンター研究員である）が試行的に運用している、「和本バンク」の所蔵本である（「和本バンク」については後述する）。

なお、本実践は、当初、対面での出前授業を計画していたが、愛知県が新型コロナウイルス感染症による、まん延防止等重点措置の対象になっていたことから、和本のみを事前に郵送してもらい、外部講師の２人（加藤弓枝・三宅宏幸）はオンラインで参加するという方法をとった。2020年度同様、大型スクリーンとプロジェクタが３台ずつ備え付けられた広い部屋で感染対策に留意しつつ、外部講師とZoomで通信しながら、加藤直志が教室でそれをサポートする態勢で行った（生徒用タブレットは使用せず）。

中学校の教育課程において、和本を活用した授業は、想定されていないものの、「中学校学習指導要領（平成29年告示）」の、我が国の言語文化に関する事項には、３学年すべてにおいて、古典の世界に親しむという指導事項が含まれていることに加え、第１学年においては「古典には様々な種類の作品があることを知ること。」（注３）という文言もある。これらの指導のための一手段としても、和本を用いた授業（注４）が有用であることを、本実践を通じて明らかにしたい。

*1　名古屋市立大学大学院人間文化研究科准教授（出前授業当時は、鶴見大学文学部教授）
*2　愛知県立大学日本文化学部准教授

２．古典学習に関するアンケート（事前）

今回も、授業の前後に古典学習に関するアンケートを実施した（【表①】）。なお、今回の授業を受けた中学３年生２クラスの生徒達は、１年生の同時期（2020年３月）にも出前授業を経験している。その際にアンケート調査も行っており（注５）、３年間の変化も見ておきたい。ただし、２年前に調査を行った時期は、新型コロナウイルス感染症による、休校措置がとられた頃とちょうど重なる。調査対象の母数が少ないのは休校の余波で、一方のクラスでしかアンケートを実施できなかったためである。

【表①】
（対象　上段：2021年度中３・74名、
　　下段：2019年度中１・38名）

	ア	イ	ウ	エ
国語の学習は大切だと思いますか？	35人 47.3%	33人 44.6%	3人 4.1%	3人 4.1%
	57.9%	39.5%	0.0%	2.7%
国語の学習は好きですか？	16人 21.7%	31人 41.9%	22人 29.8%	5人 6.8%
	36.9%	42.2%	13.2%	7.9%
古典の学習は大切だと思いますか？	13人 17.6%	30人 40.6%	21人 28.4%	10人 13.6%
	7.9%	52.7%	34.3%	5.3%
古典の学習は好きですか？	19人 25.7%	25人 33.8%	20人 27.1%	10人 13.6%
	34.3%	34.3%	23.7%	7.9%

（%は、小数点以下第１位未満の数値を切り上げた）
ア：そう思う
イ：どちらかといえばそう思う
ウ：どちらかといえばそう思わない
エ：そう思わない

中１と中３（どちらも３月の調査）を比較すると、アもしくはイを選んだ生徒の割合が、いずれの質問項目においても減少しているが、「好きですか」に比べると、「大切だと思う」については、［国語］［古典］双方で、微減に留まっている。国語を学ぶ必要性については理解しつつも、中学３年間で学習内容が難しくなるに従い、「好き」の減少につながっている可能性がうかがえる。［古典］に絞ると、大切さは否定しないが好きではない、と考える傾向にさらに拍車がかかるともいえる。2021年度中３に絞ると、［国語］については、「大切だと思う」91.9%（アとイの回答を合算した数値を示す、以下同様）と「好き」63.6%の間の開きが大きいが、［古典］については、「大切だと思う」58.2%と「好き」59.5%と数値が近接している。この調査だけで決定的なことは言えないが、本校の2021年度の中３に関しては、古典を好きだと思うことと、学ぶ意義を理解していることとの間には、関係があるのかもしれない。

【表①】の質問に加えて、「古典籍を生で見たことはありますか」、「古典籍に触ったことはありますか」という質問もしてみた。「ある」と答えたのは、前者（18名、24.4%）、後者（５名、6.8%）であった。例年アンケート項目に含まれていた、「くずし字を見たことがありますか」については、これまでにも出前授業を経験したことのある生徒達だったので、質問項目から外した。

３．使用した古典籍について

本実践では10点の和本を使用したが、それらはすべて同志社大学古典教材開発研究センターから借用した。前述の通り、同センターでは、有志から寄贈された明治時代以前の和本を、授業での使用を検討している小学校・中学校・高等学校・高等専門学校の教員へ無償で貸し出す「和本バンク」のプロジェクトを、2021年11月から試行的に開始した（注６）。寄贈された和本の簡潔な書誌と写真が記載された書目リストから、利用申込者は貸出を希望する和本を選び、郵送で借り受けるといったシステムである。より多くの児童・生徒に、直接、和本を手に取ることのできる機会を提供し、その魅力を直に感じることを通して、古典への興味・関心を高めてもらうことを目指した活動である。

2022年８月時点で、センターには100点以上の古典籍が集積されているが、稿者らが出前授業を行った際は数十点であり、その中から各クラスの10個の班に配付する、以下10点の和本を選書した（注７）。ここでは、その内容について簡潔に説明し、選書した理由については次節で触れる。

まず、１班には寛文３年（1663）に京都の長尾平兵衛（ながおへいべえ）によって刊行された『竹取物語』（大本（おおほん）、２冊）を、２班には絵入りの『平家物語』（大本、１冊）を選んだ。『平家物語』は巻５のみの端本（はほん）であるが、その版面から天和２年（1682）に全12巻で刊行されたものと同版であると考えられる。

つづいて、３班には『姿百人一首小倉錦（すがたひゃくにんいっしゅおぐらにしき）』（中本（ちゅうほん）、１冊）を、４班には豆本（まめほん）や特小本（とくしょうほん）と呼ばれる掌（てのひら）サイズの『新古今和歌集』（特小本、１冊）を配付した。『姿百人一首小倉錦』には刊年はなく江戸の和泉屋市兵衛（いずみやいちべえ）の書肆（しょし）名のみ記されているが、刷りの状態から幕末に印行されたと思しい。江戸時代には女子用往来物（江戸時代の教科書）として、膨大な百人一首が刊行されたが、本書もその一種である。また、『新古今和歌集』は明治24年（1891）に東京の金子寅次郎によって刊行されたものである。明治時代に入ると日本でも洋式の印刷・製本技術が導入されたが、その和装本から洋装本への転換は、一方向へと遷移したわけではなく、新旧の技術が入り混じりながら、進展していったとされる（注８）。このように、明治の本からは、現在の本の姿が構築されていっ

た過程を学ぶこともできる。

また、５班と６班には、江戸時代の大衆的絵入小説である草双紙の一類である合巻を配した。５班の『仮名読八犬伝』（中本、２冊）は、為永春水、鳳簫菴琴童、仮名垣魯文と書き継がれた『南総里見八犬伝』のダイジェスト版である。弘化５年（1848）から慶応２年（1866）にかけて全30編が刊行されたが、このうち嘉永４年（1851）に江戸の丁子屋平兵衛によって刊行された11編上下２冊を和本バンクは所蔵する。11編の著者は、為永春水（２世）、画師は歌川国芳である（注９）。

６班の柳亭種彦著・歌川国貞画『偐紫田舎源氏』（中本、２冊）は、合巻の代表作として名高い。『源氏物語』の舞台を室町時代に移して、歌舞伎的発想により翻案した作品であるが、大奥を描いたという風聞により、やがて絶版となった。種彦はその後まもなく没したことから、文政12年（1829）から天保13年（1842）にかけて38編が刊行されたものの、39、40編は未刊草稿のままとなった。授業で利用したものは、天保３年（1832）に江戸の鶴屋喜右衛門によって刊行された７編上下２冊である。

また、７班と８班には、それぞれ明治時代の教科書を選書した。７班の『植物小誌』（半紙本、１冊）は、明治17年（1884）に熊本の普及舎から刊行された、９歳から12歳が学ぶ小学中等科の博物学の教科書である。一方で、８班の東京師範学校教諭の磯野徳三郎が訳した『物理学初歩』（半紙本、３冊）は、明治16年（1883）に大阪の前川文栄閣から出版された物理学の入門書である。本文はくずし字ではなく漢字カタカナ交じりの楷書体で記されている。

最後に、９班と10班には、冊子体ではないものを選んだ。９班の『懐宝御江戸絵図』（畳物、１鋪）は天保10年（1840）に江戸の須原屋茂兵衛によって刊行された、江戸城下の色刷りの地図である。著名な寺社や各大名屋敷が記され、現在と共通する地名も散見される。10班の『五拾三駅独案内』（一枚物）は、明治23年（1890）に大阪の冨士ヱイが発行した色刷りの廻り双六（サイコロの目にしたがって順番に進んでいくもの）である。この前年に新橋駅から神戸駅までが鉄路で結ばれたことから、おそらくそれを記念して作成されたものであろう（注10）。発行が大阪であるため、振り出しが「大阪府」で、上がりが「新橋」となっている点がユニークである。

４．指導の実際

本節では、授業の内容について具体的に述べる。本稿末尾に掲載した、【資料１】（当日の授業の学習指導案）と【資料２～４】（スライドおよびプリント）をあわせて参照してほしい。

本実践は、中学校の授業において行ったものであるが、高校でも実施可能な内容であり―学年や授業のねらいに応じて選定する和本の種類を変える必要はあるだろうが―、指導案には、高校の「言語文化」の指導事項との対応関係も掲載しておいた。

前述の通り、各クラスを10個の班に分け、10点の和本を用意した。１班と２班は教科書記載の物語文学、３班と４班は和歌関係、５班と６班は合巻、７班と８班は明治時代の教科書、９班と10班は地図・双六関係というように、同一ジャンルの本を２つの班にそれぞれ配布した。授業開始前に、机を班ごとに配置しておき、各班に和本を１点ずつ、【資料３】と【資料４】も１枚ずつ、机上に配布しておいた。

導入では、三宅が、スライド（２）を見せながら、古典に堅苦しいといったイメージを持っている人が多いかもしれないが、当時の人々は実際にはどのようなもので読んでいたのかを体験してみるのが、この授業の目的である、と述べた。その後、加藤弓枝が、スライド（３）で、和本を扱う際の最低限の注意事項（手を洗う、装飾品は外す、筆記用具は鉛筆、両手で丁寧に扱う、本は重ねない、水平で清潔な場所に置く、１枚ずつ丁寧にめくる）について簡潔に説明し、スライド（４）（５）も使って、和本はくずし字で書かれているものが多いという点も確認した。

展開１では、各班で相談しながら、自分たちの班が担当する和本について、観察・分析してもらった。漠然と観察・分析と言われても、生徒達は困るのではないかと考え、ワークシート【資料３】の空欄を埋めながら取り組めるようにした。５つの観点（文字・挿絵・書物の形（大きさ）・書物の重さ・紙）で、現代との共通点・相違点を見つけながら、何が書いてある本なのか最後にまとめる、という形式にした。和本によって特徴が異なるため、これらすべての項目が記入できるとは限らず、わからない場合は空欄でも良いという指示も出した。生徒達は、和本を手に取りながら、じっと黙って考え込んでいたが、数分間の後、いろいろと相談する声が聞こえてきた。加藤直志が机間をまわり、それらの声に耳を傾けながら助言を与えるともに、展開２で発表してもらう班を選定した。

展開２では、ワークシートに記入した内容をクラス全体に発表することで、ほかの班がどのような和本を扱っていたのかについて情報共有した。10個の班すべてに発表してもらうだけの時間はなかったため、例えば、１班と２班のうちのどちらか、３班と４班のうちのどちらか、というように、各ジャンルから１班ずつ、合計５つの班を加藤直志が指名した。各班の代表生徒による報告の後、加藤弓枝・三宅がスライドを使った解説を加えるという展開を５回繰り返した。

１・２班は、教科書記載の物語（スライド（７））。教

科書で学んだ古典を実際に手に取るという経験をしてほしいと考え、選定した。『竹取物語』は、挿絵がないため、それをヒントにすることができず、くずし字の解読が難しい様子だった。『平家物語』には、富士川の戦いの場面の挿絵が含まれており、ちょうど、2022年の大河ドラマ「鎌倉殿の13人」でその場面が放送されたばかりだったこともあり、ドラマを見ている生徒は特に関心を持ったようである。

３・４班は、和歌関係（スライド（８））。こちらも、教科書で学んだことをもとに考えてもらうことをねらった選定である。小さな『新古今和歌集』の精密さに生徒達は驚いていた。

５・６班は、合巻（スライド（９））。多色刷りの美しさに触れて欲しいという点から選定した。ねらい通り、生徒達は、現代のマンガの源流になる要素や、鮮やかな色などに魅了されていた。

７、８班は、明治時代の教科書（スライド（10））。理系分野について書かれた和本についても生徒達に知って欲しいということで選定した。くずし字で書かれているわけではなかったが、８班の生徒達は「物理の内容が難しくてわからない」と困惑していた。古典に否定的な生徒は理系に多いだろうから、理系分野の本なら興味を引けるのでは、と安易に考えたのが、反省点である。

９、10班は、地図や双六（スライド（11））。いわゆる冊子体ではなく、現代の概念では「本」とは呼ばないものだろうが、生徒達は知っている地名に関心を寄せていた。

終結では、まず、加藤弓枝が、スライド（12）を使いながら、（本実践で紹介した和本については）和紙で作成されていて軽いものが多く、持ち運びがしやすかったことや、現代の洋紙に比べて、保存性に優れていることなど、和本の長所について解説した。次に、三宅が、スライド（13）を見せながら、表紙をつなげると一枚の絵になるという合巻の特徴が現代のマンガ本にも受け継がれていることについて、解説した。『偐紫田舎源氏』を担当した６班の生徒が、この解説を聞きながら実際に表紙を並べて確認していた姿が印象深い。さらに、三宅が、スライド（14）を見せながら、古典を学ぶ意義（古くからあるものなのだが現代の我々にとっては未知の情報が多いこと、地震の研究なども含めると理系分野においても古典籍が注目されていること、教科書は古典の一部に過ぎないこと、世界の多くの国が自国の古典を大切にしていること）についてまとめた。

授業の最後に、江戸後期の名古屋近辺の絵図（注11）をスライドに映し出し、昔の地図が災害予測に役立つ面もあることも指摘し、過去について知ることは現代にも関わることであり、未来にもつなげていくべきものであるということを、再度、三宅が力説した。授業後、スライドに映し出された絵図の前に生徒達が群がって、自宅の周辺地域を必死に探していた光景が大変印象的であった。今の自分と過去とのつながりが見出せると、古典を学ぶ意義の再認識にもつながるという一例ともいえそうだ。その意味で、古地図というのは、教材としても価値が高いということもわかった。

授業後に書いてもらった感想の一部を紹介する。

・なにがかいてあるかはわからなかったけど、紙の手触りとか重さとか、さわらないとわからないことがわかってよかった。
・古典籍にさわれて良かった。思ったより軽く今にも破れそうだった。貴重な経験ができた。古典を身近に感じられた。
・教科書では内容しか知ることができなかったが、実物を見ると、色付きの挿絵があったり、材料が和紙であるため軽いといったことを新たに知ることができてかたくるしい、といった観点から視野が広がった。
・昔の地図や駅の双六にはすごく興味が湧いた。
・海外の昔の書物に興味がわいた。
・とても楽しく授業をうけることができた。意外なことがたくさんあり、新たな発見ができてとても勉強になった。

何が書いてあるか詳細はわからずとも、手触りなどを通して、古い書物の価値や魅力を伝えることができたのではないか。さらには、狭義の「古典文学」という枠組みを越えて、地図や双六、海外の古典も含め、人類の過去の営為について知るということに興味を持ってもらえたようだ。本実践で深まった古典への興味関心をさらに満たすためには、次のステップとして、文語文法や古文単語などを詳しく学び、書かれていることを正確にわかるようにすることも欠かせない。少しでも、高校進学後の学びへの動機付けにつながったのであれば幸いである。

５．古典学習に関するアンケート（事後）

出前授業当日の帰りの時間を使い、事後アンケートも実施した。結果は以下の通り【表②】。また、【表①】と【表②】の比較をしたのが、【表③】である。事前と事後で母数が異なるのは、欠席生徒がいたためである。

【表②】
（対象　2021年度中３・76名）

	ア	イ	ウ	エ
国語の学習は大切だと思いますか？	39人 51.4%	33人 43.5%	2人 2.7%	2人 2.7%
国語の学習は好きですか？	22人 29.0%	27人 35.6%	23人 30.3%	4人 5.3%
古典の学習は大切だと思いますか？	26人 34.3%	31人 40.8%	13人 17.2%	6人 7.9%
古典の学習は好きですか？	16人 21.1%	35人 46.1%	15人 19.8%	10人 13.2%

（%は、小数点以下第１位未満の数値を切り上げた）
ア：そう思う
イ：どちらかというとそう思う
ウ：どちらかといえばそう思わい
エ：そう思わない

出前授業を実施する前と後では、以下の変化が認められた。（アとイの回答を合算した数値を示した）

・「国語の学習は大切だと思う」と答えた回答率は、微増。（91.9%→94.9%）
・「国語の学習が好き」だと答えた回答率は、ほぼ変化なし。（63.6%→64.6%）
・「古典の学習は大切だと思う」と答えた回答率は、かなり増加した。（58.2%→75.1%）
・「古典の学習が好き」だと答えた回答率は、かなり増加した。（59.5%→67.2%）

【表③】
（対象　2021年度中３・事前74名　事後76名）

	ア		イ	
	事前	事後	事前	事後
国語の学習は大切だと思いますか？	35人 47.3%	39人 51.4%	33人 44.6%	33人 43.5%
国語の学習は好きですか？	16人 21.7%	22人 29.0%	31人 41.9%	27人 35.6%
古典の学習は大切だと思いますか？	13人 17.6%	26人 34.3%	30人 40.6%	31人 40.8%
古典の学習は好きですか？	19人 25.7%	16人 21.1%	25人 33.8%	35人 46.1%

（%は、小数点以下第１位未満の数値を切り上げた）
ア：そう思う
イ：どちらかというとそう思う

数値の比較からは、本実践により、古典の学習を大切だと考える生徒、古典の学習が好きだと答えた生徒がかなり増加したといえ、授業のねらいはおおむね達成されたといえよう。とはいえ、これが高校に進学し、文語文法などの知識に関する学習の割合が増加した際にも、継続していくのかどうかについては、容易なことではないかもしれない。次に、記述回答についても検証する。【表④】を参照してほしい。

【表④】

	事前	事後
	これまで学んできた「古典」に、どのようなイメージを持っていますか？何でもいいので感じていることを書いてください。	特別授業を受けて、「古典」のイメージは変わりましたか？変わったとすれば、どのように変わったのか、書いてください。（特に変化がなければ書く必要はありません）
Ⅰ	今まで学んできたものだと、人間の道徳的な心や古典ならではの言葉の使いかた（心理や情景の表現）をよく学習した。そのため、現代文を読むよりも深い趣があるというイメージがある。今と昔の人の考え方や生活の違いも学べてとても面白いと思っている。	古典は昔の物の考え方とか見方とかが知れて、興味深いため、元々、面白いものと思っていたが、かたくるしいイメージをもっていた。しかし、今回の授業で、古典の中にもすごろくのような物や、今でいう漫画みたいなのもあって、嗜好として用いられているものもあったと知れたため、親近感がわいた。
	昔の言葉で書かれていて、今の言葉と違うからなじみのないイメージがあるが、今につながる考え方や物の捉え方が面白い。昔の言葉の意味を知ったときに古典の文章の意味が分かるのが嬉しい。	古典はとても大切で、厳重に扱わないといけないことがよく分かった。受ける前は古典籍に書いてある内容なんか分かりっこないと思っていたけど、「くずし字一覧表」を見ながら意外と読めた部分もあったで楽しかった。
Ⅱ	文法が今と違っていて覚えないといけないからちょっと面倒。将来に役立つのか分からない。	今の文化に結び付いていることも多いんだなと思い、意外と大事なのかもしれないと思った。
	難しい。専門知識を持っていないと楽しめない。	以前は古典に対してとっつきにくいイメージがあったけど、今回の授業で実際に古典籍を見たことで、昔の人も現代の我々と同じように考えていた部分も多いのではないかと思い、以前よりも身近な存在だと思えるようになった。
	難しくてややこしい。	正直前にも同じような古典の授業をうけていたので、堅苦しさが～という感想ははじめからもっていませんでした。しかし、今回初めてしっかり現物にふれたことで、本を作る上での工夫が見られ、より、人が作ったんだなと感じることができた。

Ⅲ	特別授業でやるくらいが丁度いい。	前より好きになった。でも、テストでできないからきらい。
	とても難しい。現代の言葉とは全くちがう。使う場面がない。	特にない。

記述式においては、「古典のイメージ」について質問した。事前と事後の記述内容の変化を分析し、もともとプラスイメージを抱いていた生徒が、さらに好意的になったという例をⅠ（74名中14名）、どちらかというとマイナスイメージを持っていた生徒が、授業後にプラスイメージを持ってくれたという例をⅡ（74名中35名）、マイナスイメージのままだったという例をⅢ（74名中11名）と分類した。残る14名は、この基準では分類できないような回答であった。以前にも出前授業を経験している生徒達だったので、古典を堅苦しいと思っている生徒ばかりでもないことが回答からもうかがえたが、今回の授業の後においても、依然として否定的なイメージを持っている生徒も見られた。その中身としては、書かれている内容に対してというよりも、言葉が今と違うので難しいといったことや、文法の学習への忌避などが多かった。前より好きにはなったが、テストで点がとりにくいからきらい、というのは、中高生にとっては切実な問題であり、かつて中高生であった稿者らとしても、ある意味で共感できるところもある。また、将来役に立たないとか、使わない、といった意見に対しては、古典の言葉を学ぶことで現代の言葉をより深く理解できることなどを伝えていくことが大切だろうが、それ以前に、「役立つ」「使う」とはどのようなことを指すのか、近代における学校教育の目的はどこにあるのか、といったところまで立ち戻って議論することになるのかもしれない（注12）。

６．おわりに

従来の古典教育においては、書かれている内容を正確に読み取ることが重視されてきた。その重要性は揺るがないだろうが、一方で、内容がよくわからなくても、和本に実際に触ってみることで、古典の価値や魅力の一端を学習者に伝えることができるという点には、注目しておきたい。また、本実践では、現在の国語科教育の枠組みでは、取り上げられることのないような分野の和本も紹介した。このように、和本は、国語科に限らず、様々な教科で豊かな学びを提供してくれる可能性を秘めている。とはいえ、小・中・高校などで和本を所蔵しているところは稀有であろうし、指導する教員自身が和本に触ったことがないという場合も多いだろう。そのような場合でも、本実践のように、出前授業や和本バンクを利用することで、学びの選択肢が拡がる可能性がある。近年は、学会や大学によるものだけではなく、各地の図書館、博物館、美術館などにおいても、司書や学芸員といった専門職員による各種の講座や出前授業が行われている。学習指導要領の総則には、小・中・高校すべてにおいて、

> 地域の図書館や博物館，美術館，劇場，音楽堂等の施設の活用を積極的に図り，資料を活用した情報の収集や鑑賞等の学習活動を充実すること。（注13）

といった文言が含まれており、「主体的・対話的で深い学び」を実践していく上で、外部機関と学校との連携が推奨されている。学校現場に無理な負担をかけることなく、新しい学びの機会が提供されることが望まれる。同志社大学古典教材開発研究センターの和本バンクにおいても、各校が利用しやすいよう、改善を進めていきたい。

（注）

1　これまでの出前授業については、加藤直志・加藤弓枝・三宅宏幸「くずし字による古典教育の試み―日本近世文学会による出前授業―」（『名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要』第61集、2016年12月）以降、毎年実践報告を公表しており、本稿はその７番目にあたる。

2　堀川貴司『書誌学入門―古典籍を見る・知る・読む』（勉誠出版、2010年）８頁。なお、引用文の原文はゴシック体である。

3　文部科学省「中学校学習指導要領（平成29年告示）」30頁。

4　和本を用いた古典教育については、日本近世文学会編『和本リテラシーニューズ』（第２～５号、2016年７月～2020年１月）のほか、坂本優「単元学習「和本の世界」の可能性－読書指導の一つの試みとして－」（『月刊国語教育研究』第591号、2021年７月）などに実践報告がある。

5　「くずし字による古典教育の試み（５）―江戸時代の「桃太郎」を読む・補遺―」（『名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要』第65集、2021年１月）で報告したデータを再掲した。

6　「和本バンク」の取り組みの背景や経緯、今後の展望等については、加藤弓枝「E2487-教育現場への古典籍無償貸出プロジェクト「和本バンク」」（国立国会図書館メールマガジン『カレントアウェアネス-E』No.434、2022年５月12日配信、https://current.ndl.go.jp/e2487、2022年８月25日閲覧）を参照されたい。

7　なお、今回選んだ冊子体の和本は、すべて「袋綴（ふくろとじ）」と呼ばれる文字面が外になるように紙を１枚ずつ２つ折りにして重ね、折り目でないほうの紙端を糸や紙縒（こより）で綴じた装訂であり、いずれも板木（はんぎ）と呼ばれる板に、文字や絵等を彫って刷った「整版（せいはん）」という手法で刷られたものである。

8　石橋圭一「和装本から洋装本へ」（印刷博物館編『日本印刷文化史』講談社、2020年、252～259頁）。

9　合巻の作品解説は『日本古典文学大辞典』（岩波書店、1983～1985年、第３巻619頁および第４巻600～601頁）によった。

10　種村直樹「日本を支えた動脈東海道線100年の歩み」（『鉄道ジャーナル』第271号、鉄道ジャーナル社、1989年５月、34～43頁）。

11　『尾張絵図』（江戸後期、愛知県図書館蔵）https://websv.aichi-pref-library.jp/ezu/ezudata/jpeg/698.html（2022年８月25

日閲覧）。

12　教育社会学者の広田照幸は、「学校知は、仕事に役に立つこともあれば、当然、役に立たないこともあります。なぜならば、「世界とは何か」を学ぶのであって、職業人の育成のためだけに学校があるわけではないからです。」という（『学校はなぜ退屈でなぜ大切なのか』（ちくまプリマー新書、2022年）96頁）。

13　「小学校学習指導要領（平成29年告示）」23頁、「中学校学習指導要領（平成29年告示）」24頁、「高等学校学校学習指導要領（平成30年告示）」29頁。「総則」に書かれていることであるから、国語科に限定するものではないといえる。

【付記】

※１　本稿の執筆者の掲載順については、本校教員である加藤直志を最初に掲載し、加藤弓枝と三宅宏幸については五十音順で掲載した。あくまでも便宜的なものであり、研究内容の分担率等とは無関係である。

※２　本稿は、同志社大学古典教材開発研究センター研究集会・第４回「古典教材の未来を切り拓く！」研究会（オンライン・2022年３月27日（日））における口頭発表を基にしている。

※３　【資料２】スライドの画像データの掲載に際しては、愛知県図書館と愛知県立大学長久手キャンパス図書館から画像使用の許可を賜った。記して御礼申し上げる。

※４　本研究は、JSPS科研費JP22H04099ならびに20K00326の助成を受けている。

※５　「出前授業」の問い合わせは、日本近世文学会広報企画委員会の電子メールへ。
アドレスは、koho@kinseibungakukai.com

※６　「和本バンク」の問い合わせは、以下のウェブページの問い合わせフォームへ。
https://kotekiri20.wixsite.com/cdemcjl/wahonbank

【資料１】

中学校　国語科　学習指導案

指導者　加藤直志・加藤弓枝・三宅宏幸

１．日　時　　2022年３月16日（水）　第２限（Ａ組）・第３限（Ｂ組）
２．対　象　　名古屋大学教育学部附属中学校　第３学年Ａ・Ｂ組
３．教　材　　和本バンクから借り出した和本
４．単元の目標（全１時間）

［中学校学習指導要領（平成29年告示）］
〔知識及び技能〕
・歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して，その世界に親しむこと。
（我が国の言語文化に関する事項　ア）
〔思考力，判断力，表現力等〕
・文章を読んで考えを広げたり深めたりして，人間，社会，自然などについて，自分の意見をもつこと。（Ｃ　読むこと　エ）
［高等学校学習指導要領（平成30年告示）「言語文化」］
〔知識及び技能〕
・言葉には，文化の継承，発展，創造を支える働きがあることを理解すること。
（言葉の特徴や使い方に関する事項　ア）
・古典の世界に親しむために，作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること。
（我が国の言語文化に関する事項　イ）
〔思考力，判断力，表現力等〕
・作品の内容や解釈を踏まえ，自分のものの見方，感じ方，考え方を深め，我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。（Ｂ　読むこと　（１）のオ）

５．本時の目標
（１）和本に直接触れることを通して、古典の世界に親しむこと。
（２）和本に直接触れることを通して、我が国の言語文化や書物文化についての考えを広げたり深めたりして，人間，社会，自然などについて，自分の意見をもつこと。

６．本時の評価規準（◆）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
（１）和本に直接触れることを通して、古典の世界に親しむことができている。	（２）和本に直接触れることを通して、我が国の言語文化や書物文化についての考えを広げたり深めたりして，人間，社会，自然などについて，自分の意見をもつことができている。	（３）和本に直接触れることを通して、古典の世界に親しみ、我が国の言語文化や書物文化についての考えを広げたり深めたりして，人間，社会，自然などについて,自分の意見をもとうとしている。

７．本時の展開

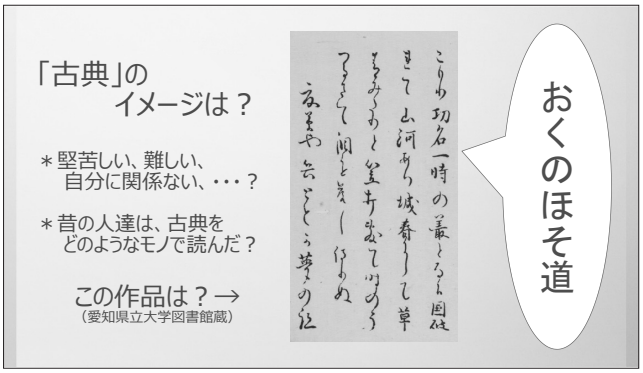
	学習内容	学習活動	指導上の留意点（・）と評価の観点（◆）
導入 10分	・本時の内容と目標の確認。 ・和本の扱い方について知る。	・古典のイメージについて確認する。 ・和本の扱い方について聞く。	・班分けした座席配置にし、各班に１点ずつの和本と【資料３・４】をあらかじめ配布しておく。 ・和本を扱う際の注意点を確認する。 ・和本の内容はくずし字で書かれていることが多いことを確認する。 ◆…（３）

展開１ 15分	・和本を観察し、レポートを作成する。	・「古典籍についてのレポート」【資料３】の空欄を埋めていく。	・班のなかで相談してもよいと指示する。 ・「くずし字一覧表」【資料４】を参照してもよいと指示する。 ・適宜、机間指導を行う。 ◆…（１）（３）
展開２ 15分	・生徒の発表と授業者の解説により、各班の和本について、クラス全体で知る。	・5つの班の代表者がレポートの内容を発表する。 ・授業者の解説を聞く。	・各班２分程度で、レポート内容を発表する。 ・発表内容を踏まえて、研究者の視点から、解説をする。 ◆…（１）（２）（３）
終結 10分	・和本の長所について知る。 ・古典を学ぶ意義について知る。	・和本の長所についての理解を深める。 ・古典を学ぶ意義についての理解を深める。	・和本のモノとしての長所について、解説する。 ・研究者の視点から、古典を学ぶ意義について補足する。 ◆…（１）（２）（３）

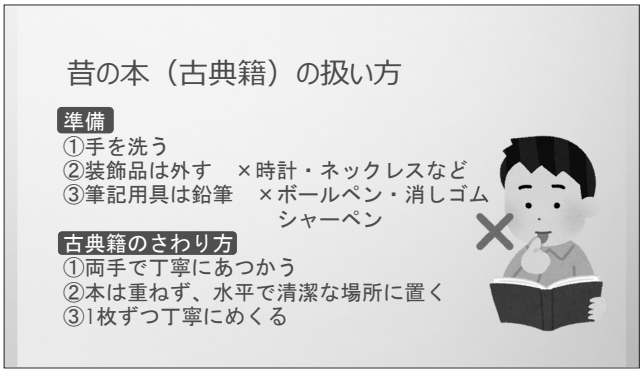
※導入・展開２・終結は主に加藤弓枝と三宅が、展開１は主に加藤直志が担当した。

【資料２】スライド（パワーポイント）

（1）



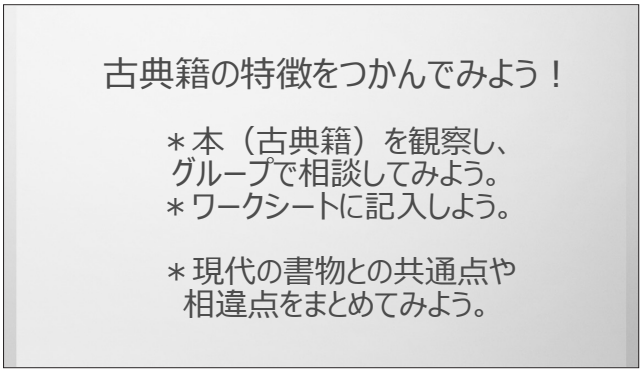
（2）



（3）

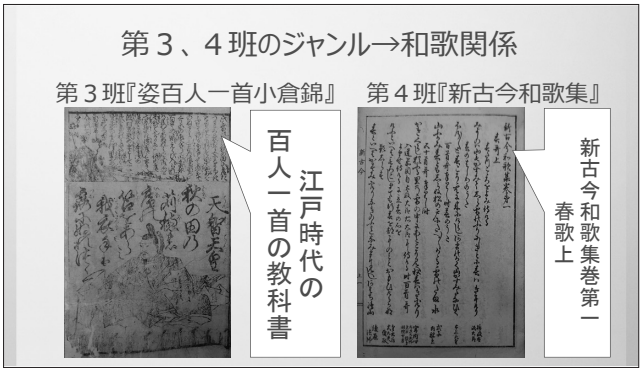
（4）

（5）



（6）

（7）



（8）

第５、６班のジャンル→合巻（江戸時代の絵本）

第５班『仮名読八犬伝』

絵と文章が同居。（漫画の祖先？）

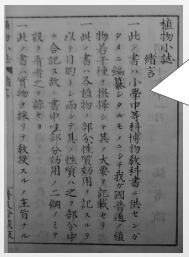
第６班『偐紫田舎源氏』

多色刷り（カラー）の表紙

（9）

第７、８班のジャンル→教科書関係

第７班『植物小誌』



明治時代の植物についての教科書

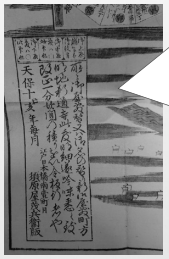
第８班『物理学初歩』

気球などの絵を描いた物理学の教科書

（10）

第９、10班のジャンル→地図・双六関係

第９班『懐宝御江戸絵図』



屋敷替えがあった場所などを改めて、出版された地図

第10班『五拾三駅独案内図』

はじまりは大阪府、次に「西京」（京都）、いくつもの駅を経て、ゴールは新宿の双六

（11）

【本の重さ】→軽い和紙で作成されている

「三條勘太郎」→
長友千代治氏『近世貸本屋の研究』
（東京堂出版、1982年）より引用

和紙の特徴
①洋紙に比べ保存性が高い
②薄くて強い

（12）

現代との連続性

『偐紫田舎源氏』
上巻と下巻の表紙
２枚で１枚の構図

➡『ONE PIECE』表紙の趣向と共通
（江戸時代から行われていた！）

出前授業では
『ONE PIECE』の
21巻と22巻の表紙
について紹介した

（13）

古典（古典籍）の意義

⑴未知の世界を知ることができる
⑵文・理問わず、古典籍は注目されている
⑶教科書教材の古典は一部でしかない
⑷世界の多くの国では古典は重視されている

（14）

古典籍の有効性

過去の人たちの
知識が我々や
未来の人々の
役に立つ！

→ハザードマップ

『尾張絵図』
江戸後期
（愛知県図書館）
https://websv.aichi-pref-library.jp/ezu/public/index.html

（15）

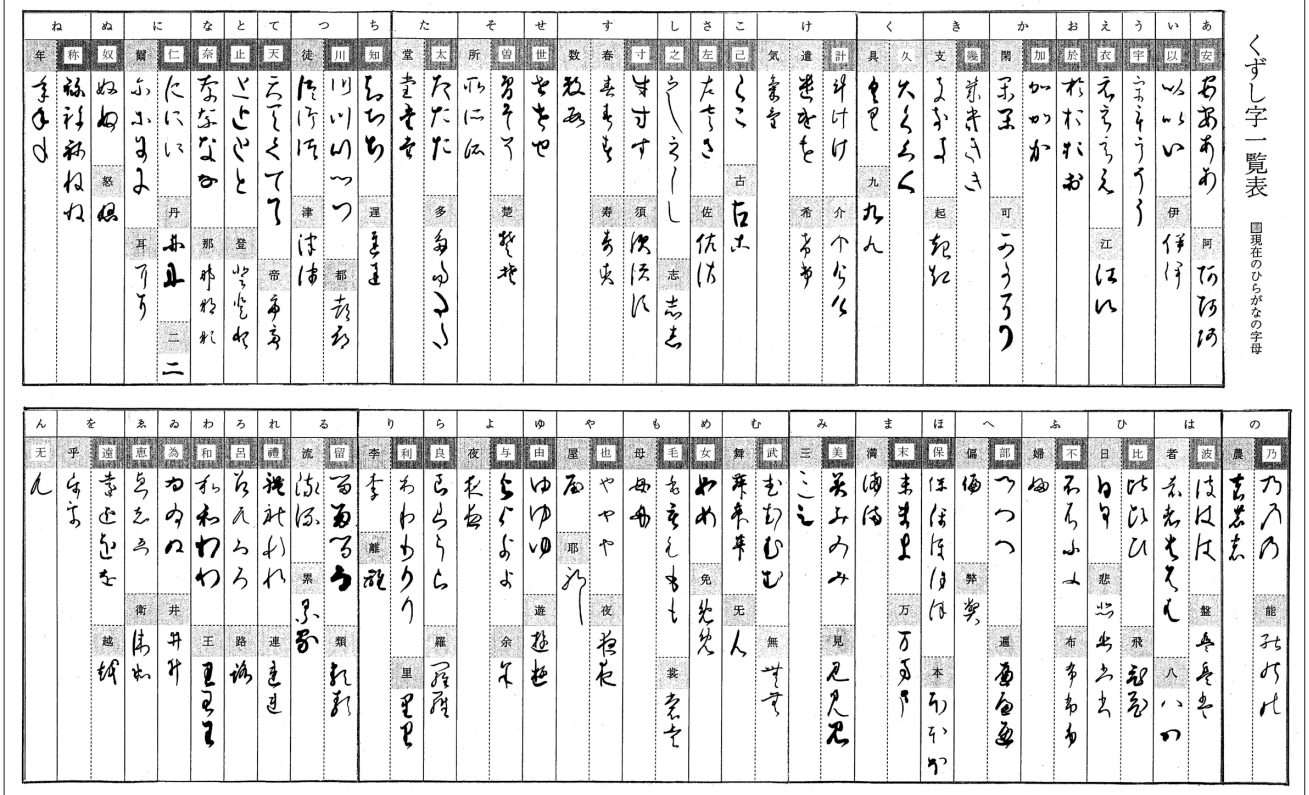
【資料３】ワークシート「古典籍についてのレポート」

日本近世文学会
出前授業「昔の本に触ってみよう」　二〇二二年三月十六日（水）

古典籍についてのレポート

班	
班員氏名	班員氏名
班員氏名	班員氏名

	現代と違うところ	現代と共通するところ
使われている文字		
挿絵（さしえ）（ない本もあります）		
書物の形（大きさ）		
書物の重さ		
紙		

本全体として、何が書いてるか（本の内容）

【資料４】（中野三敏『くずし字で「百人一首」を楽しむ』2010年、角川学芸出版）